第３回柏・我孫子・鎌ケ谷地区地域協議会　記録

１　日　　時　　令和５年３月１７日（金）　午後１時３０分から３時３０分まで
２　場　　所　　ザ・クレストホテル柏　カトレヤルーム
３　出 席 者　　１１名／１５名
４　概　　要

（１）第２回柏・我孫子・鎌ケ谷地区地域協議会の記録（案）について

委員に確認し、承認

（２）柏・我孫子・鎌ケ谷地区の県立高校の適正規模・適正配置について

①　望ましい学校規模について

資料１に基づき、事務局より説明

【 座　長 】

「望ましい学校規模について」、質問や意見をお願いしたい。

【 委　員 】

募集定員に至らない学校について、受検生から選ばれない理由についてはどうか。

《 事務局 》

選ばれない理由を説明するのは難しい。子どもたちは規模の大きい学校を選ぶ傾向があり、高倍率になる。逆に選ばれる理由として、駅から近いなど交通の利便性があり。低倍率の学校は拍車をかけて生徒が減少していく。その結果、高倍率の学校との二極化が進んでしまう。

【 委　員 】

倍率の問題が顕著になってきたのはここ２、３年である。３、４年前に私立高校への就学支援金が拡充し、次の年に入試を一本化した。また、私立と公立の両方を受検した場合、私学を受けた生徒はチャレンジで公立のトップ校を受検する。一方、学力が低い生徒については、安全に私立しか受けない傾向がある。本校のようにセーフティーネット的な高校では様々な困難を抱える生徒が入ってくる。広報として、ＳＮＳ、インスタグラムを通じて情報発信しているが、倍率に結びつかない。これまでの地域協議会の中で説明があったが、通信制への進学率が 3.8%に上昇し、新しい潮流がある。また、私立高校は歩留まりを考慮して合格者数を設定している。そして、最近では、歩留まり以上に入学している。小規模校のメリットは手厚い指導ができることであり、課題としては学校に活気がなくなることである。

【 委　員 】

今の委員の説明は一部正しいが、一部そうとは言えない部分がある。入学者選抜が一本化されてから倍率が割れているのは、私立に先に受かったから、とだけとは言えない。公立と私立の両方が受かった場合、生徒は受かった方に行けばよいという仕組みになっており、どうしても公立に入学したい生徒は公立を受けるはずであるからである。私立が先に受かったから公立は受けるのを止める、というのはただ単に先に受かったから、ということではなく、公立よりも私立の方が良いと考えた結果としてそういう選択をしたのだと言えるのではないか。また、これまで一部の学校においては、歩留まりを見誤ったとして定員を大きく超える入学生を入学させている学校があったが、そのような学校は県の補助金をカットされたりしており、千葉県私立中高協会としても、定員を遵守してもらうように指導してきたところ、今回は守ってくれるようになった。単に私立が先だから、というのは、受検生のチョイスとしては違うのではないか。

【 委　員 】

歩留まりとは何か。

【 委　員 】

公立より先に私立の入試があるので、私立としては定員より多い合格者を出す必要がある。その場合、例えば、歩留まりが40%とすると、100人入学してもらうには、250人くらい合格させなければならない。この差を歩留まりと言っている。歩留まりは予測するしかないので、それを30%と予測すれば約300人の合格を出すし、50%と予測すれば200人の合格者を出すということになる。もし、30%と予測して、実際には50%だとしたら入学者は150人となり、50人の定員超過となる。

【 委　員 】

自分の子どもの時は公立の入学者選抜は２回であった。今の受検生の保護者から意見を聞いたところ、２回の時の２回目では遅く、２回の時の１回目の時期に公立の入学者選抜があるとよい。また、子どもが二人いる場合、二人とも私立に行かせるのは、家計的にきつい。例えば、併願で私立に受かっていると、公立の２次募集は受けられず、私立に行かなくてはならない状況があるので、何とかならないか。

【 委　員 】

中学校の進路指導は最近変化してきた。これまでは、先生の方でこのような学校がありますよ、という指導であったが、生徒に自分で調べてくるように指導するようになった。そこで、生徒は塾の先生の意見を重視するようになった。さらに、私立の就学支援が拡充し、公立との差がなくなってきた。

《 事務局 》

２次募集を受検できない問題については、併願で私立に合格したのだから、私立に行かなくてはならないというように教育的に指導しているのではないか。私立への就学支援金について、年収の目安が590万円未満の世帯に対して月に9,900円から最大で33,000円になり、寄付金と施設費分を納入することくらいの違いになった。そして、コロナ禍があり、早く決めたいという心理が働いた結果ではないか。

【 委　員 】

資料により公立の倍率は理解できたが、私立についてはどうか。

【 委　員 】

県内に私立高校全日制が56校、通信制が10校あるが、４割は定員割れをしている。その一方で、定員を超過している高校もある。千葉県私立中高協会と県教育委員会が収容人数について議論する場があるが、そこで毎年、私立と公立の割合を決めている。郡部の海に近い方や南の方は募集に苦慮している高校もある。

【 委　員 】

東葛地区の私立の募集人員はどうか。

【 委　員 】

松戸も入れて10校あり、４クラス規模から10クラス規模のところまである。中学校から高校に何人上がるかで高校で何人募集するか決まるので、学校によって開きがある。6～10クラスの範囲になるのではないか。

【 委　員 】

鎌ケ谷市は市立高校がなく、中学校で子どもの数が減少したら教員が減ってしまう。高校が存在する分だけ教員が必要になる。松戸南高校などはニーズがあり倍率が高い。きめ細かい教育により、教員も必要である。公立の小中学校では、正規の教員が不足している。高校で教員がいらないのであれば小中に回してほしいくらいである。私立の通信制高校のニーズが高いが、公立においてもニーズに合った教育として、普通科に通信制を併設するなど、特に鎌ヶ谷西高校付近には将来、北千葉道路に接続する幹線道路が開通し、利便性が高まるので、どうか。

【 委　員 】

鎌ヶ谷西高校には将来、北千葉道路が開通することから利便性が改善することが見込まれる。市の都市計画の部署では、ハザードマップを作成するが、公立学校が避難所になっており、地域の防災上の役割を担っている。

【 委　員 】

今の学校の形で苦しい生徒が不登校になっている。様々な困難を抱え教室に入れないので、ある程度の規模の適正化を図り、様々な困難を抱えている生徒を受け入れられる学校の形を作っていかなくてはならない。地域に愛される学校づくり、地域を愛する生徒の育成を図ることが大切である。

《 事務局 》

様々な困難を抱えている生徒への対応として、地域連携アクティブスクールを東葛飾地区では流山北高校に設置しており、県内４校において、学び直しや実践的なキャリア教育を推進している。そして、第１次実施プログラムにおいて、令和６年度に行徳高校と市原高校に設置することとした。また、多様なニーズに対応するため、三部制定時制高校を松戸南高校、生浜高校、佐倉南高校に設置している。

【 委　員 】

入学者が減少すると、何をやるにしても負担が大きくなる。劇をやるにしても、見ている保護者の方が生徒よりも多い状況が生じたり、委員会活動においては、生徒一人が何役も引き受けなくては委員会活動が成り立たなくなったりする。掃除当番も同様である。できるなら１学年 10 クラスくらいあってもよいと思う。

【 委　員 】

１学級の人数は、40 人であるが、地域のトップ校では、生徒が自立しているので、48 人学級でもよい。教育困難校においてはそうはいかない状況であるが、標準法により、１学級当たりの人数は東葛飾高校と同様に 40 人である。

【 座　長 】

欠席者の意見を紹介してほしい。

※欠席者の意見

文科省のワーキンググループの参考資料に小規模校のメリットと課題を示したものがあり、論点が整理されており参考になった。成人年齢引き下げにより高校在学中に成人になることから、多様な人間と切磋琢磨していく必要があると感じた。また、本校は小規模校のため、生徒が高校に進学して多様な人間関係を作ることができるか心配になる生徒がいるが、高校に行って少しずつ成長していけるとよい。

１学級 40 人というのを変えることは難しいのかもしれないが、鎌ヶ谷西高校、沼南高校、沼

南高柳高校、我孫子東高校は、できれば１学級の人数が 30 人～35 人くらいが良いのではないかと思う。本校から上記の学校を受検する生徒は、学力があまり高くなく、一人一人丁寧に見てあげる必要のある生徒が多い傾向にある。本来、高校生になったら自立して、学習や自分自身のことをできるようにならなくてはいけないと思うが、これらの高校の生徒は、丁寧に支援していかないと難しいのではないかと想像している。我孫子東高校は、先生方がとても丁寧に授業をしているのを見せていただいたことがある。３年間、高校で学ぶ中で生徒たちが自信を持ち、卒業してから社会とつながって生きていくためには、１学級の生徒数を少なくする環境ができたらよいとも思う。学級数については、どのくらいが適正かよくわからないが、最低でも１学年４学級はないと活気がなくなるのではないかと考える。

《 事務局 》

最近統合した上総高校では、部活動の部員が確保できず、生徒が他の部活動に助っ人部員を募集して、ようやくメンバーを揃えて大会に出場していた部活動もあった。上総高校の時には、部活動を頑張る生徒よりもアルバイトを優先する生徒が多かったが、君津高校に残った園芸科では、君津高校と統合して、活気ある学校の雰囲気に刺激を受けて、園芸科の生徒も部活動を頑張るようになったと聞いている。

【 委　員 】

全県を考えた場合、都市部と郡部の１学年当たりのクラス数については、都市部では６～８学級、郡部では４～８学級で問題ないのではないか。その中で、学びのセーフティーネットを担保することができるようにしてほしい。

【 座　長 】

他に欠席者の意見はないか。

※その他の欠席者の意見

定員割れをしている学校の様子を聞くと、1 クラスの人数が 20～30 人程度ではあるが、1 クラスの人数が少ない分、一人一人にしっかりと手をかけることができ、学校も落ち着いていると聞いている。高校は学区の中学校卒業者数などをもとに学級数を設定し、募集学級数により職員の定数が決定されるので、定員割れの結果として、少人数教育が展開できる状況となっている訳であり、第３学区においては、東京、埼玉、茨城などへの私立高校への流出に加え、県内の私立への流出が多い地区であるので、柏・我孫子・鎌ケ谷地区の現状に見合った学級数を設定すべきであるとも考える。

学校の自助努力により、定められた募集学級数を超える学級数を設置して、きめ細かな教育を展開している高校があるようだが、ある程度の教員がいないと展開できないと思うので、一定規模は必要であると思う。適正規模の維持で、単位制などにより学年を越えた学びができるようになる。そうなれば、数多くの先輩をモデルとして学んでいくことで自身の進路に生かすことができる。統合を行っていくとするならば、市内に高校数が限られていると中高連携に支障が出てしまうので、高校の数が多い自治体において統合を行ってほしい。学校数が多いと施設設備の充実において、全ての学校に行き届くまで時間がかかるのではないか。統合などの機会にトイレの洋式化などをセットで行うことにより、スピード感を持って施設設備の充実と魅力化の発信を図る

ことはできないか。規模の大きな学校は、交通の便が良いところにある場合が多いため、様々な地域から生徒が集まりやすいので、幅広く交友関係を築けるし、切磋琢磨できる環境が整いやすいのではないか。

プランでは、都市部における適正規模を１学年６～８学級としているが、今後中学校卒業者数の減少が見込まれている中で、また、都市部は私立高校との生徒の取り合いという状況もあるので、最低６学級にこだわる必要はあるのか、郡部と同様の４学級にするという考えはないのか。また、統合により学区内の学級数全体を減らすことをバランスよく議論する必要があるのではないか。学校数が多い東葛地区においては、生徒数を確保するだけでなく、教員も見つけるのが大変であるため、できるなら手厚い指導を推進していきたいが、募集学級数に応じた教員の配置を県立高校では行っているので、バランスを保つのが大切ではないか。統合を検討する考え方の中に、定員割れが続き、適正規模に満たない学校であっても、その地区・地域との関係性は重視した方がよいのではないか。特に、限られた学校数しかない自治体においては、慎重に検討していく必要があるのではないか。

第３次ベビーブームが起こらなかったにも関わらず、平成 22 年に一時的に生徒数が増加した要因が良く分からないが、都市部における適正規模を超える学級数を募集していた柏南、柏陵、柏中央高校３校に共通していることは、都心のベットタウンである東葛地域においての開発が後発地域で、開発に伴い新住民が増えたことでの生徒数増であるような気がする。しかしながら、全体の現状生徒数減少は変わらない中、小規模校のメリットや課題を踏まえて考えると１学級の生徒数 40 人で学級数を減らすことが良いのか、それとも１学級の生徒数を減らして学級数を維持した方が良いのかを検討する必要があると考える。また、管内の高校間で常に問題点を共有し合う場を設け、共通部分は連携して行く必要があると考える。例えば、球技クラブ活動においては合同練習とか、あるいは音楽科の合唱・合奏でも合同練習が考えられると思う。

現状を考えると学級減は否めないとは思うが、学びの保障のために、より多くの地域に学校を残していただきたいと思う。35 人学級など少人数学級についても検討いただけると幸いである。

②　柏・我孫子・鎌ケ谷地区における魅力ある高校について

資料２「柏・我孫子・鎌ケ谷地区における魅力ある高校について」に基づき、事務局より説明

【 座　長 】

「この地区における魅力ある高校について」、質問や意見をお願いしたい。

【 委　員 】

普通科が多い中、普通科にコースを設置していくことについては理解できるが、将来の職業の予備校という印象を受ける。職業人材の育成も大切であるが、地域で何を学べるか、何を学んだ方がよいかを考えていくべきではないか。我孫子市は自然が豊かで、市域面積の３割以上が農地であり、種蒔きから収穫、そして事業者と連携した販売まで、食糧自給や自然環境保全に関する一連を学べる環境があるので、高校生には是非、活用してほしい。

【 委　員 】

前回に配付された東葛飾高校の学校案内を見ると、体験重視の授業が展開されていることがわ

かった。今後、知識を吸収する授業だけでなく、体験型の授業が重視されるのではないか。このような授業形態は他校でも行われているのか。

《 事務局 》

県内全ての高校において、「総合的な探究の時間」を設けており、探究学習を取り入れている学校が多い。この授業の中で、インターンシップを取り入れている学校も数多くある。

【 委　員 】

小中高校生の自殺が 500 人に上っている。そのうち高校生は 300 人に上る。主な理由として、進路や学業を挙げているが、生徒が希望する学校に進めるようにしていく方策を考えたり、学校におけるカウンセラーによる対応を拡充していく必要があるのではないか。

【 委　員 】

普通科を土木科などに改編することは可能か。

《 事務局 》

増えすぎた普通科高校の中に職業系専門学科を設置するよりも、普通科の中に多様なコースを設置していくことの方が実効性があると考えている。我孫子高校の教員基礎コース、我孫子東高校の福祉コース、鎌ヶ谷西高校の保育基礎コースなどにおいて、体験型の学びを行ってきた。

【 座　長 】

欠席者の意見を紹介してほしい。

《 事務局 》

普通科高校が多いこと自体は、選択する中学生にとっては悪いことではないと思う。高校受験を前にして、将来の夢を決めている生徒は多くないという印象であり、漠然と「大学(専門学校)に行きたい」「就職したい」と考えている生徒が多く、「高校に行ってから将来の夢を探したい」と話す生徒もいる。柏・我孫子・鎌ケ谷地区だけでなく、東葛飾地区全体を見ても、様々な企業・大学等があるので、地域連携（産官学）として「産業コース」の設置はどうか。これまでの職業科をさらに発展させ、産官学の連携を密にして、社会のニーズに応えるために、近隣の企業・大学等と常に連携して授業（体験学習を含む）を行ったり、起業するためのノウハウを学べたりするような、これからの社会の即戦力となる人材の育成を図るコースを設置してみてはどうか。また、高校内に独自に「会社」を作って、自分たちで経営していくことも学びの発展につながるのではないか。

【 委　員 】

どのようなコースを設置しても、学校の先生の本気度が問われている。沼南高校においては、優れた指導者により、あと一歩で甲子園に出場できるというところまで行ったが、指導者の異動により、部活動が下火になってしまった側面もある。学校の体制づくりは重要である。

【 委　員 】

我孫子高校の定員割れはショックであった。教員基礎コースを設置しても定員を確保できなくなると教員不足の課題の解消は進まないのではないか。学校では、熱意のある指導はできているのか。

【 委　員 】

我孫子高校においては、これまで勉強も部活動も頑張る生徒を育成してきた。コロナにより部活動の制限があり十分に生徒の期待に応えられない状況が続いた。本校においては、ボクシング

部に優れた指導者がおり、その先生を慕って入学してくる生徒がいる。その先生が異動しても、部活動が継続できるようにしていきたい。

【 委　員 】

進路のニーズに応じた学びを保障していくことについては、夢を育みながら、職業に繋げる学びを行っていく必要があるのではないか。そして、子どもの特徴に見合ったカリキュラムを編制していくとともに、教員の研修を充実していく必要がある。

【 委　員 】

商工会議所主催で柏の企業が参加し高校生対象の就職説明会を開催した。各高校の取組についてはどうか。

【 委　員 】

本校でも就職指導については熱心に取り組んでいるが、なかなか外にその取組が伝わっていないというのが現状である。

【 委　員 】

「総合的な探究の時間」というのは、東葛飾高校が有名なのか。困難校においても、考える力や課題解決のために対応する力を養っていくことが大切であると思う。

【 委　員 】

私立高校同士の横の連携を図ることはなかなか難しい。公立高校であれば、例えば東葛飾高校の医歯薬コースの授業に他の高校の生徒がリモートで参加することなどはできるのではないか。この協議会では職業に向けたコースの発想が多い気がするが、学び方の獲得なども積極的に推進していってはどうか。

【 座　長 】

他に欠席者の意見はないか。

《 事務局 》

普通科高校における地域連携として、農業に興味がある生徒さんに活用してもらえるよう私の方でコーディネートしていきたい。

県立の通信制の学校が少ないため、進路の選択肢を増やすためにも検討してほしい。

【 委　員 】

私たち大人の目線からではなく、アンケート調査などにより小中学生から見た高校の魅力の把握に努めてほしい。

※その他の欠席者の意見

困難校に進む生徒の中には、家庭環境が厳しく、経済的に苦しい場合が多いので、こうした生徒が習熟度別授業の実施や福祉やビジネスなど地域の特徴を生かした学びの展開など、経済的に恵まれない生徒の選択肢をより充実させて、様々なサポートを受けながら温かみのある学習環境で豊かな教育を受け、地元就職につなげられるとよい。就職先も魅力の一つなのかと思うので、アピールによって、中学生や保護者も興味を持つと思う。また、我孫子市には数多くの特別老人福祉施設が有るが、前回の協議会で我孫子東高校の福祉コース出身者の多くの生徒が地元の施設等に就職していると知った。福祉コースの学びなど、仕事に直結する資格が取得できる学校では、

ある程度の生徒数がいないと専門の教員を確保できないと思う。そして、普通科高校において様々な特性を持った生徒が様々な職種に就職するために必要な知識・技術を身につけるためには、多様な科目を開設し教えられる教員が必要なので、ある程度の学校規模がないと展開できないのではないかと思う。

改革プランの方向性を考えた場合、定員割れしている学校を統合するだけでなく、その学校を残しつつ地域連携アクティブスクールを拡充させる方向で教育活動の充実を図ることはどうか（教育課程の中に、新たなコース等を設置する等）。また、普通科高校において、多様な生徒への対応として、各高校において、自助努力により、習熟度別授業などを展開しているところもあるようだが、多様な科目を開設し教えられる教員を担保（確保）するために、ある程度の学校規模を維持していく必要があるのではないか。

基礎資料の P. 3～P. 8 の各校の進路状況を見ると、4 年制大学への進学率の高い高校ほとんどが 70%以上と、そうではない高校の進学率が 30%未満と落差が大きい。進学率 30%未満の高校の進路として就職が占めている割合が多いことから、高校在学中に社会人としての大切な素養や意識付けを身に付けておく必要があると考える。何が必要かと言うと、以前の会議でも発言があったが、挨拶が出来ることがまずは基本であると考える。会社においては、人とのコミュニケーションが最も大切な事で、コミュニケーションの基本が挨拶である。そして聞く力（他人の意見）、話す力（自分の考え）を養っておくと良いと思う。会社現場で離職する要因が最も多いのが、人間関係が上手く結べない事であるそうだ。仕事は楽しくても、人間関係が嫌だから離職するでは、仕事のスキルアップが遅れるし、次の就職先では飽きやすいという評価に繋がるので、コミュニケーション能力は大切である。個人差があるかと思うが、ロールプレイングなどで訓練されると良いと考える。また、我孫子市においては、農福連携について、最近、大手企業さん（我孫子では(株)帝人）や、個人の事業家さんが手掛けていらっしゃる。作業工程を企業が作り上げ、農業技術指導は地元の農家さんにお願いして、簡単な作業（草取り、収穫作業、梱包作業等）を福祉施設の方々にお願いしているようである。行政からは福祉課と農政課ら両方の支援がいただけるようである。問題は販路で、販路を決めてからの経営が望ましい。

特別支援の視点から学びを支えていただける学校が増えると良いと考える。情緒面のサポートやインクルーシブの考えを取り入れた教育などは魅力がある。さらにバリアフリーの施設であることも必要かと思う。

《 事務局 》

これまで３回にわたり御多用の中、協議会に御参加いただき感謝申し上げる。本日のテーマは、適正規模・適正配置ということで、厳しいテーマについて、皆様の御意見を伺っており、適正規模は維持しつつ、今できているきめ細かな学びや多様なニーズへの対応をいかに担保していくかということが非常に重要であると考えている。これまでいただいた御意見については、この地域の高校改革を進めていく中で、是非、参考とさせていただきながら、新たなプログラムに落とし込んでいきたいと考えている。今回で３回終了するが、これで全てが解決するわけではない。今後、このような形で皆さんに集まっていただくことは難しいと思うので、個別に私たちが御相談をさせていただきながら進めていきたいと考えている、よろしくお願いしたい。